唐詩における「本歌取り」の探求

安藤　信廣

矢嶋美都子著
唐詩の系譜　名詩の本歌取り

四六判　240頁
研文出版
［本体 2,700円＋税］

日本の和歌の歴史のなかで、鎌倉時代に確立された作歌法に「本歌取り」がある。古い歌の一部を借りて新しい歌を作り、イメージを重ねあわせる修辞法である。その本歌取りと同じ、あるいは似た技法が唐詩にも見られるとし、その技法によって唐詩の系譜をたどろうとしたのが本書である。本書の「はじめに」には、こういう。

…「本歌取り」は本来、和歌などで先人の作の語句、発想、趣向を取り入れて作る（重層的で複雑な世界を創造する）技法であり、「本歌取り」を直訳する中国語が無いことからも分かるように、中国の古典詩では同様のことを説明する際には誰の某詩を踏まえる、意識する、下敷きにする、影響を受けているなどと表現するのが一般的です。しかしある時、「本歌取り」といった方が少なくとも日本人学生にはより分かり易く伝わるのではないか、と気づいたので本書でも「本歌取り」の語を用いてみました（五頁）。

これによるならば、本書では「本歌取り」という言葉をひろい意味で用い、先行詩を手本にし、その表現を意識的にふまえて作詩することを、この名で呼んだものと考えられる。「誰の某詩を踏まえる」ことと、本書でいう「本歌取り」は、近似した意味で用いられているのである。

＊

本書は次のように構成されている（副題は省略する）。

はじめに
一　初唐・張九齢の「照鏡見白髪」詩を本歌とする詩
二　初唐・張九齢の「秋夕望月」詩を本歌とする詩
三　盛唐・王維の「送元二使安西」詩を本歌とする詩

四　盛唐・王維の「九月九日憶山東兄弟」詩を本歌とする詩
五　盛唐・王昌齢の「芙蓉楼送辛漸」詩を本歌とする詩の系譜
六　盛唐・岑参の「磧中作」詩を本歌とする詩の系譜
七　盛唐・崔顥の「黄鶴楼」詩を本歌とする詩
八　中唐・元稹の「行宮」詩を本歌とする詩の系譜
九　盛唐・李白の「清平調子」其三を本歌とする詩の系譜
十　雁に託す望郷表現の系譜
十一　日本漢詩にみる唐詩の受容（本歌取り？）
あとがき

この目次から明らかなように、本書は、初唐、盛唐、中唐の著名な詩の詩句を挙げ、それを「本歌」として作られた唐詩を例示し、それぞれの系譜を丹念にたどっている。

「二　初唐・張九齢の「秋夕望月」詩を本歌とする詩」（副題「恋しい人を待つ庭に「青苔」「黄葉」がある情景の系譜」）の例を見よう。初唐の張九齢の「秋夕望月」詩は、「秋の明月のもと、恋しい人の面影を追う気持ちを詠じた」（八一頁）ものである。そのなかに、

皎潔青苔露　　皎潔（きようけつ）たり青苔の露
蕭條黄葉風　　蕭條たり黄葉の風

との表現がある。緑の苔に清らかな露が降り、風が黄葉に寂しく吹きよせる。自分の立っている庭の情景である。その庭の情景描写には、たいせつな人のおとずれを待つ思いがこめられている。この対句のもとになった表現は、六朝・梁の丘遲「贈何郎」（何郎に贈る）詩にあるが、張九齢の「秋夕望月」詩が特に後代に強い影響をあたえたことを、著者は指摘する。

たとえば盛唐・李白の「寄遠」（遠きに寄す）詩の末尾に、

相思黄葉落　　相い思えば黄葉落ち
白露点青苔　　白露　青苔に点ず

とあり、これは去っていった美人をしのびながら見る庭の情景であるが、愛しい人の去った庭に、何故「黄葉」と「青苔」があらわれるのか。それは、この詩が右の張九齢「秋夕望月」詩の「本歌取り」をしているからだ、と著者はいう。李白の「寄遠」詩が張九齢の「秋夕望月」詩を踏まえていること、それによって李白「寄遠」詩の抒情の深さが伝わってくることを、著者は指摘する。

中唐・劉長卿の「酬李穆」（李穆に酬ゆ）詩では、末尾に次の表現がある。

欲払柴門迎遠客　　柴門を払って遠客を迎えんと欲すれば
青苔黄葉満貧家　　青苔黄葉　貧家に満つ

「遠客」を迎えようとするとき、貧しい我が家に「青苔」「黄葉」が満ちる。この表現を自然な文脈で理解するためには、「青苔」「黄葉」に、たいせつな人の面影を追う思いをこめた張九齢の詩句を踏まえなければならない。張九齢の詩句を介在させたとき、はじめて、劉長卿の詩にみちる心情の美しさが立ちあらわれる。その意味で、劉長卿「酬李穆」詩は、張九齢の「秋夕望月」詩を本歌取りしている、と著者はいう。詩の奥行きをとらえた、重要な指摘である。

＊

ただ、「本歌取り」という和歌の技法にかかわる用語を用いる以上、その用語自体の検討は必要だったと思われる。大岡信は『日本の詩歌　その骨組みと素肌』（岩波書店、二〇一七年一一月）のなかで、こういう。

これ（「本歌取り」の技法）は、秀作と多くの人に認められている先人の歌の表現の一部を、意識的に借用して自分の作品を構成する方法です。…この場合、借用する歌は必ず有名な古歌でなければなりませんでした。…本歌取りは、往年の名作の剽窃ではなく、逆に、一風変った仕方による、その名作へのオマージュであり、またその作品を生まれかわらせることでありました（七六頁）。

よく知られているのは、『新古今和歌集』巻六に載る藤原定家の次の歌の例だろう。

駒とめて袖うちはらふかげもなしさののわたりの雪の夕暮

これは、『万葉集』巻三の長忌寸奥麻呂（ながのいみきおきまろ）の次の歌を本歌としている。

苦しくも降りくる雨かみわの崎さのの渡りに家もあらなくに

『万葉集』の歌が、雨にぬれながら旅をする苦しみを描くのに対し、定家の歌は、見わたすかぎりの「雪の夕暮」の優雅な美しさを描いている。しかし、定家の歌は『万葉集』の歌を否定しているのではなく、その羈旅の辛苦、深い孤独感、それに耐える精神などを重ねあわせている。重ねあわせることによって、自己の歌に厳しい精神性をもたらし、且つ、『万葉集』の歌がもつ精神性を「発見」しているのである。さらに、万葉時代の官人の少し荒々しい表現のなかに、優雅さが胚胎していたことを示してもいるのである。

藤原定家が『詠歌之大概』などで厳しく方法化した「本歌取り」は、たしかにその後しだいに拡大解釈され、近世に入ると意味が拡散したといわれる。とはいえ、どのような含意で唐詩に対してこの語を用いるのかという定義は、検討・明示されても良かったのではないかと思う。

＊

しかし本書の真価は、「本歌取り」といわなければならないほど、唐代の詩人たちが真剣に先行作品を学び、それを自覚的に対象化していたことを示した点にある。なかでも印象深いのは、「五　盛唐・王昌齢の「芙蓉楼送辛漸」詩を本歌とする詩の系譜」（副題「旅立つ人に伝言を託す構想の送別詩」）である。王昌齢の「芙蓉楼送辛漸」（芙蓉楼にて辛漸を送る）詩は、南方に左遷されていた作者が、都洛陽に帰る辛漸に、伝言を託すという形の詩である。その末尾に、こういう。

洛陽親友如相問　洛陽の親友　如し相い問わば
一片氷心在玉壺　一片の氷心　玉壺に在り

洛陽の旧友たちに、「王昌齢は清らかに澄みきった氷が玉壺の中にある、そんな心境だと伝えてくれ」（本書一二一頁）という意である。この表現につき、筆者はこう指摘する。

この句が当時の人たちに斬新だと衝撃を与えたのは、左遷されてしょぼくれているだろう、と思っていた王昌齢の意外な心境だったからであり、またこの詩がすでに有名であった王維の「送別」詩の「旅立つ人に伝言を託す構想」を本歌取りしたものでありながら、その伝言内容が本歌とは全く別趣のものだったからです（一二一頁）。

王維の「送別」詩の末尾は、次のとおり。

為報故人顙頟尽　為に報ぜよ故人に　顙頟（しょうすい）し尽くし
如今不似洛陽時　如今　洛陽の時に似ずと

王維も左遷されていて、都に帰る友人に伝言を託すのだが、それは「自分はやつれ果てていると伝えてくれ」というものだった。「洛陽」にいたころの華やかな姿と、「顙頟」した現在との落差を、端的な伝言の形にしたところに魅力があ

中国年鑑2019

◎ 好評発売中 ◎

中国研究所　編・発行

明石書店　発売

1955年創刊。現代中国に関する最新・基本情報満載の、一国を扱う珍しい年鑑。

B5判　約500頁

価格：18,000円＋税

◆特集＝米中対立の構図

◆動向

政治、台湾・香港・マカオ・華僑、対外関係、経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済・国民生活、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、宗教ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2018年日誌ほか

※お問い合わせ・ご予約は
中国研究所事務局まで

一般社団法人　中国研究所

〒112－0012
東京都文京区大塚6-22-18
TEL：03-3947-8029
FAX：03-3947-8039
e-mail:c-chuken@tcn-catv.ne.jp
URL:http://www.chuken1946.or.jp

る。とはいえ、そこには状況に対峙する強さが見られない。王昌齢は、それを「本歌取り」して、鮮やかに伝言内容を逆転させ、左遷されても澄みきった心境でいる自己を描きだしたのだと、著者は指摘する。こうした著者の指摘によって、王昌齢の「一片氷心在玉壺」という表現の真の斬新さが明らかになったといえよう。

著者は、本書の構想の出発点に、興膳宏「王昌齢の創作論」（『中国詩人論　岡村繁教授退官記念論集』所収、汲古書院、一九八六年）からの刺激があったことを、「あとがき」で述べている。興膳宏論文は、王昌齢の詩論書『詩格』を考察、分析したものである。その『詩格』のなかに、詩を作る者は「古今の詩語の精妙の処を抄し」、「新奇の調有らば之を学ぶべし」などの言葉があり、筆者はそれに触発されて、本書の基礎となる構想を得たという。

王昌齢が『詩格』に右のように書きとめていることの意義は大きい。彼が、先行作品への注意と対峙を自覚的に行っていたことを、まちがいなく示すからである。そして本書によって、その王昌齢自身の「芙蓉楼送辛漸」詩に即して、『詩格』に書きとめられた努力の上に、「本歌取り」が行われている実情が示されたのである。

＊

本書は、唐代の詩人たちが先行する詩作品にどのように向き合ったか、それをもとにどのように新たな世界を作りあげたかを、「本歌取り」という和歌の用語を用いて、分かりやすく示した。分かりやすく示したとはいえ、その調査対象の博大さは、作業の困難を暗示している。

本書は、「本歌取り」を重ねた唐代詩人たちの営みを追体験する場でもある。古典や同時代の文学を継承して創作しようとするとき、まず必要であったのは、個々の作品に自覚的に向きあい、そのなかから新しい価値を発見することだったに違いない。文学的継承は、それを自覚的に行うかぎり、新たな発見と表裏するものだった。継承という行為による発見、発見としての継承を、唐代詩人たちが営々として重ねてきたことを、本書は示している。

（あんどう・のぶひろ　東京女子大学名誉教授）